

# 04年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 漁獲		産 地				輸 入			輸 出	
	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ	アカイカ	マツコウイカ	コウイカ	調製品	イカ			
15	254.0	45.0	66.6	55.4	19.8	0.6	41.7	51.3	32.6	35.1	16.3
16	213.0	58.0	80.0	43.6	4.0	0.0	46.7	60.7	32.3	42.2	20.8
%	84	129	120	79	20	4	112	118	99	120	127

年	消 費 地		在 庫 量			消費支出 生(円) イカ		
	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ	アカイカ	その他			
15	46.8	12.6	2.1	6.9	54.2	9.6	36.0	3,297
16	44.6	11.8	2.5	8.0	41.5	9.5	35.3	3,232
%	95	94	116	115	77	99	98	98

年	産 地				輸 入		輸 出	消 費 地		消費支出 生(円) イカ			
	スルメイカ	アカイカ	マツコウイカ	コウイカ	スルメイカ	コウイカ		スルメイカ	コウイカ				
15	169	197	202	175	145	437	593	144	366	293	618	812	3,545
16	238	298	227	92	129	405	590	135	389	316	597	772	3,055
%	141	151	112	53	89	93	99	94	106	108	97	95	86

## スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しており、本年もその範疇に入っているが、中でもかなり低位の水準であった。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群は、1950～60年代にピークを迎えたが、その後80年代に低水準となり、89年以降増加に転じ、90年代に入って中～高位の水準で安定していた。しかし、98年以降の資源量は経年変動が大きい。2004年級の資源量は2003年級をやや下回ると言われておりその資源動向は中位水準で横ばい傾向とみられている。

主に日本海（対馬暖流系）で漁獲の対象になる秋生まれ群の資源水準は、1970年代の後半から86年まで減少傾向にあったが、1987年以降、1998年に一時的に減少したが、1999年に回復し、2002年までは1980年代の3倍と言われており、2003年、2004年はやや減少しているとみられているが、依然その水準が高いと言われている。したがって2004年級の資源動向は高位水準でやや減少傾向とみられている。

## 産地水揚量と価格

16年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）8万トン（前年6.7万トン）、冷4.4万トン（前年5.5万トン）と生鮮は増加、冷凍は減少した。

TACの採補実績に基づく漁業種類別漁獲量はトロール4.4万トン（前年3.6万トン）、まき網1.5万トン（前年1.5万トン）、釣りの生鮮が6.2万トン（前年6.4万トン）、釣りの冷凍4.5万トン（前年5.5万トン）と漁業種類別にそれぞれ増減があったのが特徴。

冷凍は、本年も昨年同様北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）と日本海に分かれての操業であったが、赤イカは初夏の初航海にややまとまった程度で近海含めて周年低調な漁模様であった。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海8,891トン（前年8,322トン）、太平洋63,812トン（前年55,996トン）、オホーツク0トン（前年0トン）で、各海域とも漁獲がやや増加した。また近年増加している九州北部での漁獲も5,142トンで前年（4,427トン）を上回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、今年も概ね日本海操業が主体で日本海でのするめいか漁は前年を下回ったがそれなりに順調であった。

また本年も業界では、従来からスルメイカー極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進等の指導は本年も続いた。

産地価格は、生鮮238円で前年（169円）、冷凍は298円で前年（197円）何れも前年を上回った。

本年の特徴は、本年も冷凍スルメイカの水揚げ減少が顕著であった、本年の冷凍のサイズ組成は、21～25尾サイズが29%で前年（31%）をやや下回り、26～30サイズも24%で前年（30%）やや少ない程度、サイズ組成も20尾以下は17%で前年（12%）より多く、やや大型化している、AR、FOR、ペルー水域等、海外でのイカ類はペルーあかいか良かった他は昨年に引き続き低調な漁で、特にAR、FORでは悪かった、等である。

## 在庫量

16年は前年以上に軽い6.4万トンの在庫から始まり、例年通り6月に最低になったが、その数量は2.5万トンで平成年代最低の数字であった。その後、新漁の水揚げが始まったが今一つ漁の伸びもなく低迷したことから、在庫の膨らみも緩く、越年在庫は5.3万トンと近年でも最低の数字であった。したがって平均在庫量も、4.1万トンで、前年（5.4万トン）をかなり下回り、スルメイカ資源の低迷期であった昭和50年代の水準まで下がっている。

## 消費地入荷量と価格

スルメイカの消費地入荷量は、生4.5万トン（前年4.7万トン）、冷凍1.2万トン（前年1.3万トン）であった。本年はイカ類全般の生産がやや低調であったことで生鮮・冷凍とも入荷が引き続き前年を下回った。価格は、生389円（前年366円）、冷316円（前年293円）で生・冷とも3年続きで強含んだ。

消費支出でみると購入数量は微減であったものの金額ベースではかなりの支出減となった。

## NZイカ

16年のNZイカ釣漁は、本年は3隻700トンであった。因みに前年度1隻の操業で1,050トンであった。

産地水揚量（全漁連）は、974トンで前年（1,047トン）をやや下回った。

価格は205円で前年（133円）大きく上回った。イカ類全体の供給量の減少を反映したものである。

## SWAイカ

16年のS W A マツイカ釣漁は、A R 12隻 - 10,000トン（前年14隻 - 12,093トン）、F O R 4隻 - 100トン（前年13隻 - 8,905トン）、SA公海5隻 100トン（前年21隻 2,783トン）であった。

何れの海域も低調で、特にフォークランド、SA公海は大きく減少、平成14年から裸用船方式への切り替えで操業隻数の減少が目立った。

産地水揚量（全漁連）は、2,715トンで前年（18,720トン）を大幅に下回った。

価格は234円で前年（206円）を上回り、3年続きの高値推移であった。

マツイカのサイズアソート(R物)は、51-60サイズ19%、36-40%サイズ18%、31-35サイズ16%で前年(16-20が22%、26-30が20%、21-25が18%)より小型化が顕著であった。

## アカイカ

本年も、中型船の漁期当初の漁がやや良かった程度で推移したが、その他の季節は近海、沖合（東経170度以東水域）とも極めて低調のまま推移した。したがって近年では悪かった2002（平成14）年より悪い漁で、凶漁といっても良い漁であった。本年の冷凍水揚が前年を上回ったのは前シーズン（今年の1 - 3月水揚げ）分の水揚げが多かったためである。また、小型船は昨年やや回復したが再度極めて低調に推移した。なお、大型船（沖合操業）は7隻600トンで、前年（7隻720トン）をやや下回った。

全漁連集計によると、生31トン（前年527トン）、冷1.4トン（前年1.3万トン）であった。

産地価格は、生197円（前年182円）、冷210円(前年271円)であった。

水揚げの減少・低迷が続いていることが、近年中国を主体とした諸外国からの製品輸入も年々多く、冷凍赤いかの下落が著しく、本年は年初の水揚げ増もあり、年間を通じて軟調相場であった。

海外赤いかは、ペルーのみ(200海里内外)の操業であったが、夫々13隻-40,600トン、11隻-3,400トン、で、昨年実績（11隻-19,027トン、10隻-3,749トン）でペルー海域では前年を大幅に上回り、公海では若干下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾72以下%（昨年は5尾以下が76%）と超特大サイズに偏り昨年同様に大型が多かった。

産地水揚量（全漁連）は、31,970トンで前年（29,038トン）をやや上回った。

価格は92円でほぼ前年（91円）並みで推移した。

## 輸入イカ

16年の輸入イカは、中国主体に6万トンと前年（5.1万トン）を上回った。

価格は、搬入の増加を反映し上昇が顕著で405円と前年（437円）をやや下回った。

冷凍イカの主要輸入国は、中国25,042トン（前年19,901トン）、タイ9,838トン（前年9,267トン）、ベトナム5,295トン（前年4,483トン）、インド1,764トン（1,354トン）、米国5,429トン(前年6,246トン)、モロッコ544トン（前年1,592トン）、NZ1,308トン(前年449トン)で引続いて中国の増加が目立ち、ベトナム、タイ等アジアからの輸入も多かった。

16年の輸出は、2.1万トンで前年（1.6万トン）をかなり上回った。

## モンゴイカ

15年のコウイカの輸入は、3.2万トンで前年（3.3万トン）並みで大きな変化はない。

価格は、590円で前年（593円）並みであった。

消費地入荷量は、0.8万トンで輸入の減少もほぼ収まったこともあり、久し振りに前年（0.7万トン）を上回った。

価格は、772円で前年（812円）を久し振りにやや下回って推移した。